

My Page

Contents

- ▼巻頭特集 座談会
「心のバリアフリーを」
- ▼地域レポート
「フェアトレードくらぶ金沢」
「春蘭の里実行委員会」
- ▼「地域づくりリーダー講座」開講
「加賀温泉周辺探検隊」
「七尾西湾・周遊地図づくり」
「イベント企画実践塾」
- ▼交流とネットワーク
「第10回 地域づくり団体
全国研修交流会宮崎大会」
「福井でも興味を示してくれた
地域づくり屋台」
- ▼コア・エッセイ
「“地域づくり”を想う
—三州足助屋敷で感じたこと—」

石川県地域づくり推進協議会

VOL. 4
1999.3

情報誌

個性

が輝く

いろんな人がいて
刺激があって
魅力的な地域が育つ。

〔創造的な環境を作る〕

「心のバリアフリー」を ~地域づくりと女と男、……~

特集 座談会

「地域づくり」に頑張っていても家族から理解が得られないという話を、協議会のメンバーからよくうかがいます。いろいろな活動を行う場合も、重要なのは性や年齢や障害のちがいなどを超えてゆくことです。今回は、女性をゲストに、男性がホスト役になって話しあっていただきました。男女も含めて、いかにバリアのない活動を展開することができるか、という結論になりました。

【ゲスト】堀 直子(リトル・パイン・シアター)

城下由香里(ほほえみの会)

手取洋子(生ゴミリサイクルネットワーク石川支部)

【ホスト】毎田雄一(ワークショップIN小松)

大湯章吉(能登乃國ゆするぎ塾)

毎田●まず今日のテーマの「男女が一緒にできる地域づくり」に入る前に、それぞれの活動のあらましを伺えますか?

堀 ●“リトル・パイン・シアター”を始めたきっかけは、いくつもあるんですが、子供が生まれ、母親として、若い人たちが楽しんで創造的に暮らしている雰囲気の中で、子供を育てたいと思ったことです。

「地域づくり」という男性的でオフィシャルな言葉を私たちは使わないし、地域づくりのためにつくりました、とは照れくさくて言えないけれど、一番大きな要因として、根っこにはあつたと思います。

あと、国際交流としてグローバルなメッセージを入れたいとか、いろんな年齢の人たちが関わる生涯学習の要素にも興味があつた。

11年間続きましたが、1、2年目はみんな初めてのことでの面白いという感じから、3、4年目になると欲も出てきて、もっと良くしたいとか地域の人たちにメッセージしたいと広がりが出たり、グループとしての人間関係などいろんな問題を経て、今は私は御隠居です。みんな、リトル・パインをやりながら、波及効果として、それぞれの分野でやりたいことを自主的にやっています。自分たちで企画したり、誰かが中心になってグループを作ったり、力が湧き出ているような状況です。

毎田●リトル・パイン(小松)の名称からも、地域を良くしたいという思いを感じます。子供のために始めたとはいえ、子育てとの両立に感心するんですが?

堀 ●私が「いい母親」として子育てだけに集中できないこともあったと思います。それと、母親だけが子育てをするのではなく、社会の中で育てることに興味があった。その意味で、いろんな人が協力してくれたと思います。母親と子供だけの時間も大切だけれど、地域の人や近所の人に育てられました。

〔自分のできることを責任もって〕

城下●私たちは、平成3年の全国障害者スポーツ大会「ほほえみの石川大会」で、パソコン通信を使って、競技結果や大会の様子、応援メッセージなどを全国に送受信するサービスを、全国で初めて、それも障害者自身の手で行ったんですが、その時に集まったみんなが、大会終了と同時に終わりではい



けない、と「ほほえみの会」を作りました。

それまでのいろんなサークルでの活動は、同じ種類の障害とかタテ割の関係が多かったけれど、健常者も含めていろんな人でできたのが自信にもなった。

ボランティアは何かをしてあげる側、障害者はしてもらうのが当たり前という傾向があるかな?と思う中で、そんな付き合い方や考え方の壁を壊して、分け隔てなく、自分のできることを責任を持つてしようとしています。

活動内容は、パソコンの講習会が主で、自治体の福祉関係のイベントに出演したり、会場に来られない人の所に出向いて教えています。

毎田●パソコン通信にも、いろんな情報があると思います。どんな情報を扱ってらっしゃるんでしょう?

城下●まだ進行中なんですが、目的の一つとして、バリアフリー情報をまとめてインターネットで発信し、そこからのネットワークも広めたいと思っています。

毎田●バリアフリーに関する既存の情報を見ても、まだまだ整理不足なので、当事者からの情報発信は大事ですね。



そうなると、生ゴミって臭いし汚いと思われているものだけれど、私にとっては大切に思えてきた。今は、美川町内のサークルのほかに、全国に輪が広がっています。

環境のことは、知識も大事でしうけれど、一人一人が行動しないと、全然進まないんです。行動することが、すごく大事です。

毎田●身近なことから始めて、それが広がつていったことが分かりますね。できた野菜の味が、何よりの説得材料になるのも良いですね。

手取●虫もつきにくいし、病気にもなりにくい。そして、できた野菜の味が良いのがはっきり分かるんです。美川では、美味しく作れる方法と聞いて、来られる方が多いです。

毎田●いろんな活動をする際、まわりの人の理解が大切ですが、みなさんの会では、家族の協力について、何かありますか。

城下●一人では外出できない方もいますので、やはり、家族の協力が必要なこともあります。本人の「出たい」という気持ちが基本ですが。

[家族を含めた活動を]

堀●プロまでやりたいと言うと、厳格なお父さんが反対したりの例はありますが、リトルに参加して登校拒否が直ったとか、家族の絆が深まったとか、お母さんを連れ出していろんな人の話を聞かせることで、世界が広がつたり。家族も含めたりトル・パインを目指しています。

城下●家族ではないけれど、車椅子の方と目の見えない方で、それぞれ一人ずつでは外出できないが、2人だとお互い持つ

活動紹介
1
リトル・パイン
シアター
【堀 直子】



◎平成10年「この思い、熱く! ~ミュージカル勧進帳~」



◎平成8、9年「月のかけら」



◎たくさんのスタッフに支えられる



堀 直子



城下由香里



手取洋子

てないものを出し合って行動できる、という例があります。
毎田●楽しんで活動することによって、周りに良い仲間ができる、協力しあう、家族も刺激になるのは良いですね。逆に、何年かやって、家族の確執はできませんか？

[女の口マン、男の不満]

堀 ●できます。日曜日の練習に出ると、母親を取られたような気になるようです。家のことが手抜きだと、夫じゃなくて子供に言われて「スイマセン」みたいなこともあります。

半分は自慢みたいにも思っているようですが、お腹がすいたときに自分でやりながら、「母親は何やってんだ」みたいな気持ちと両方あると思います。

大湯●地域づくりについて語る時、昔は「男の口マン、女の不満」と言わされたのが、「女のサロン、男の不満」の時代を経て「女の口マン、男の不満」となってきたのかな、と思うんですが、男性はどの程度参加されていますか。

堀 ●リトルは、去年いい男が3人入ってきて、それまでの女性が多い宝塚的な雰囲気からガラツと変わりましたね。和やかで、慎ましさのある女性のいい部分が出てきました。お互いに良い所を見せたい意識もあって、それで最近活発になったのかもしれないけれど、男女のバランスがとれている、楽しみながら集中できるのかな。2倍3倍の意見が出たり、いい意味で引き出し合う。

手取●生ゴミ処理という性質上、主婦の方が多いですが、会員には男性も結構います。

城下●我々の活動の場合、男女とか言っている場合じゃない。障害の種類とか健常者とか、超えなければいけない壁が多くて。毎田●先程もほほえみの会から、男女差の前に、付き合い方、考え方の壁を壊していくといふ話がありました。聞き流してしまいそうな言葉ですが、そこに込められた想いには、かなり大きなものがあると思います。

[心のバリアフリー]

城下●できることをやると、自信を持つてみんなと付き合えるし、まず普通の人だと理解してもらうことが大切かなと思っています。一方で、今までいろんな人たちの手をいっぱい借りて生きてきたので、恩返しとして、自立をし、仕事をす

ることが一つ。

それぞれの得意な分野を伸ばして協力しあって仕事をする。私達は“ワークステーション”と呼んでいますが、そういうものを作つていけたらいい。

今、バリアフリーという言葉が流行つてゐる、と言うが浸透してきます。しかし私のような肢体障害者からみれば、手すりを付けねば良いとか思われがちな気がする。確かにそれによつて外に出られたり、いろんな所に行けてありがたい面もあるけれど、実は人の心が一番バリアなんです。

金沢にノンステップバスが出来て、車が運転できなかつたり電動車椅子を持っていない方には、それが交通手段であり、世界を広げる手段なんですが、乗る間、他のお客様は待つていなくちゃならない。待つている間に迷惑な顔をされたり「困ったわ」みたいなことを口々に言われたりすると、すごくツライだけれど、それに負けないと理解してもらえない。

また、私たちの場合は手すりなどモノで解決できることが多いですが、ろうあの方の場合、コミュニケーション手段が手話だつたり口をはつきり開けることだったり、やはり心のバリアを取らないといけないことも、もっとみんなに理解してほしい。

堀 ●私たちのグループとは違うなあと、感心して聞いていたんですが、ほほえみの会は謙虚さが出発点になっていますよね。心のバリアフリーについても学ぶことがたくさんあるし、みんなのお蔭で生かされているっていうことが根本にある。日本の場合、ある時期までお母さんが育てていた子供が、会社員になると会社のスローガンに乗つて、心の余裕をどんどん排除して削ぎ落としていかないと、生き残れない。それほど苛烈な競争に巻き込まれている。

例えば、昔イギリスに行った時のことを今思い出したんですが、イギリスの紳士が空港でバス停までトランクを持って行ってくれたんです。彼は長旅から帰つて来たとかで、こーんな大きな荷物が10個ぐらいあるのに、私のことを思い遣るデリカシーがあるわけです。その帰りに大阪空港の階段で、大変な思いをしてそのトランクを持ってきたんですが、グレイのスーツを着た男性が、手ぶらか小さい荷物だけを持って、昔のミュージカルによくあるキャラバン隊みたいに脇目も振らず、朝のラッシュ時ですから100人も200人もいるのに、みんな知らん顔して通る。何てまあ、日本の男ってのは魅

活動紹介
2
ほほえみの会
[城下由香里]



◎スタートの頃のたまり場



◎パソコン教室を各地で開催



◎仲間でぶどう狩りを楽しむ

力がないんだろうと思いますよねえ、やっぱり。
手取●エレベーターなんかでもハッキリ違いますよね。日本もだんだんそうなって来ていると思うけど、家庭ではまだまだ。

[スローガンのいらない時代へ]

每田●イギリス、アメリカで長く暮らしてらっしゃって日本を見ると、どうですか？

堀●大きく違うところは、同室に男性と女性が寝ていたとすると、日本だと「何かあった」って考えるのが普通みたいな感覚があるじゃないですか。これは極端な例ですけど、でも、イギリスの学生さんが「何もなかった」って言つたら、何もなかつたんだなって思う。それだけ女性を尊重してるし、愛し合っている関係でなく、友人関係であればへんな意識はないんですね。欧米は、女性と男性を意識することや、あるいは人間として仲間になるバランスの取り方が上手い。

日本は、対等であるべきところも分かれてたり、交わってるところは、男と女がつくる社会」とか人間が何とかと言うと、アレルギーを起こしちゃう。そういう言葉をあえて使わない時代に入った時がホンモノかな？

手取●お友達からの電話で、女性も男性も同じようにお給料をいただけるけど、残業も同じようにしなくちゃいけない。また、男性も子育てをしなくちゃいけないという話を聞いて、そうすると心配なのは、欧米ではとてもマナーができるで、男性が女性を大事にすることも小さい頃から躰けられているでしょう？日本では、男の人はエライんだからと威張ってきて、そういう躰の中で平等化していくと、どうなるのか想像もつかない。いたわりとかが薄れていくんじゃないか。そうしたら、どんな社会が出来るんだろう。

日本の中で、「おんなじ」って決めてしまう前に、何でもっと話し合いがなかつたのか。男性・女性の特色を活かした男女参画ならいいけど。

堀●殿様と女中みたいな関係のまま、女性も対等という近代的な思想が入ってきたために、同じお金をもらって同じ地位を持つのであれば、女性も同じように男性的な部分を出さなければならない。男性と女性の特質を活かし合いながらやっていくのが、日本は下手だなあと思いますね。

昔、子供が育つ家の中には、殿様と女中のような夫婦がいた。今の私たちはそうじゃないよう一生懸命やっているけど、社

会に出た途端、社会や会社の方針が「家の事なんか顧みなくていい」ぐらい会社に縛り付けちゃう。日本の社会の問題が複雑に絡み合っているから、一つの事だけで話が終わらないですね。

大湯●いろんな団体を見ていると、女性5人に男性1人の割合だと、チームワークが上手くできるなあと感じています。女性という特性に個々の特性をプラス・アルファしながら、1+1を10にするような地域づくりができたらしいなと思う。大切なのは、それを分かつているリーダーがいるかどうか。

堀●演劇というとカリスマが一人いるっていう古い考え方があるけど、ミュージカルはみんなが押し上げていく。今、求められているのは、重箱の隅まで良く見えるA型タイプのリーダーじゃなくて、できないことはできないとハッキリ言うような、楽な関係じゃないですか？

会社の中もそう。日本の企業も経済も、今が転換期。今まではワンマン社長にワーッとついて行く時代でしたけど、これだけみんながモノを持っていて生産が緩やかになってくると、全ての機構が変わっていく、これからは人間を謳歌していく時代かも。一人一人がリラックスして、心のバリアを全て取り払っていく。今は、その転換期かもしれませんね。

[桜は桜、梅は梅]

手取●役職を持つ方が威張ってしまう傾向はやはり変わったらしいなあ、と思うし、桜は桜、梅は梅なりにみんな良いところがある。そういう「桜梅通り」を発揮していくようになれる、もっともっと良くなるかなあ。

每田●肩書きがないと、つきあえないというのではなくて、取り扱ったところの、人間の中身でつきあっていきたいですよね。

堀●そういう意味で「ふつうの感覚」が重要視される。障害者の方は、私たちが病気になつたり年をとらないと気付かないことを、もっと早くから分かつてらっしゃるように、いろんな特性を持っている訳だから、それを活かせるように。

手取●教育もそうですよね。子供さんを決めてしまわずに、それぞれの個性を発揮できるようになればいい。

城下●障害もひとつの個性と見てもらえたたら。

手取●それができて初めて、男女参画とか言うのならいい。

堀●男女参画なんていう、肩肘はるのような言葉も使わない。型を取り払った、心のバリアフリーの時代。それですね、次の21世紀は。



每田雄一

「心のバリアフリーを

特集
座談会



大湯章吉

活動紹介

3 生ゴミリサイクルネットワーク 石川支部 [手取洋子]



◎セミナーで講師をつとめる



◎ケナフで紙すき体験



◎奥の方が生ゴミで育てた野菜

AREA
REPORT

1

地域レポート



フェアトレードくらぶ金沢

連絡先 金沢市中橋2-8 TEL 076-232-9230

<http://www2.shift.ne.jp/~mana/index.html>

売上の3%をフィリピンに

金沢駅から歩いて数分、ややもすると見逃してしまいそうだが手作りらしき看板「フェアトレードくらぶ金沢」を見つけることができた。中には、所狭しと、お茶、乾燥フルーツ、ジャム、Tシャツ、食器・・・あらゆる物がぎっしり並べられていて1日中眺めても飽きないので?と思う。此処はボランティア団体が運営する店。そこで葛葉さんから話を伺いました。彼女はフィリピンで飢えた子供達に出会い、恵まれない環境の中にも子供達の輝く瞳、明るい表情を見、何故?と疑問を抱き、日本の子供との落差に憤りを感じた。子供は皆平等の思いを強くし、何か自分に出来ることはないかと思いついたのがフェアトレードだそうです。

カンパは簡単。でもその先を考えると、単にあげるだけ貢うだけの関係では駄目。彼らが作った品を自分たちが仲立ちとなり売る。一人でも多くの人に買って貢うことで彼らの生活を支え、人間的関わりを深めながら彼らの自立も促していく。

勿論、此処の商品は全て無農薬で、身体だけでなく環境問題もきちんと考えていて、毎月売上の3%をフィリピンの児童施設に送っているそうです。単なるボランティアで終わらせず、法人格を取り、商売として認めてもらい、きちんと税金を払ってやって行きたいとも話しておられました。

子供っておもしろい!もっと知りたい!

そこから出発した彼女の行動。何に価値観を置くかで生き方も違ってくるのでは?と話される言葉には、少しの気負いも無く輝いています。彼女に出会い、自分の生き方を考えさせられました。

(砂山芳子/志賀町国際交流の会 SMILE)





フェアトレードでは、互いの自立と地域づくりが大切

“貿易”というと、誰かが儲けるための商業、というイメージですが、フェアトレードが目指す貿易はそうではありません。今日見られるような、第三世界で住民の健康や人権や生命をも犠牲にして、日本などの先進国に供給するための食糧や原料や工業製品が安く生産される不平等な貿易ではなく、互いが対等である形を目指しているのです。

「フェアトレードくらぶ金沢」では、様々な国からの品物を販売することで現代世界の在り方を問いかねていますが、特に力を入れているのは、フィリピンとの付き合いです。現地住民の経済的自立につながる無農薬バナナの共同購入、孤児院の支援、椰子の実の工芸品づくりの指導と輸入などを手掛けられています。

代表の葛葉むつみさんによると、フィリピンなど第三世界との付き合いを通して、当初の「かわいそうな人たちを助ける」という考えがなくなつたといいます。フィリピンの貧しい子供たちを見ていると、「同じ子供なのに、日本の子供とどうしてこんなに生きていく環境が違うのか」と思う反面、「どうしてこんなに活き活きとして、生きることが楽しそうなんだろう」とも感じるそうです。

フェアトレードでは、現地の住民の自立を助けることを目指していますが、その中で「本当に自立していく、とはどういうことなのか」「食糧自給率30%程度で生活必需品を海外に頼っている日本の生活は、自立しているといえるのか」「日本の地域や家族の状況は、フィリピンで求められているような状況になっているのか」「こちら側の自立も求められている」という気づきが生まれ、自分に返ってくるのです。

そこで「フェアトレードくらぶ金沢」の、これから目標は、金沢においてしっかりと地域づくりをしていくこと、そしてNPO法人格を取って、きちんと税金が納められる団体になること、だそうです。

(毎田雄一／ワークショップ IN 小松)



AREA
REPORT

2 レポート



春蘭の里を訪ねて

恵み豊かな能登の山々の真只中に“春蘭の里”があった。まず中本会長さんのお宅に伺い、昨秋から取り組んでいる全国の春蘭マップ作りで集めた全国各地の春蘭を見せていただいた。微妙に花の大きさや色合いが違う。焼きが入った素朴で芸術的な竹製の鉢や植木鉢がズラリと並んでいて花を付けている。

次に“春蘭の宿”に行った。大きな囲炉裏が切ってあり、炭火が赤々と燃え、メンバーが次々と集まってきた。能都町の元気印の七人衆だ。炭を焼く人、ごりを採る名人、水墨画を描く人、木工にたける人等々、それぞれの特技を生かしながら中本会長を核に見事なスクラムを組んでいる。自分たちが住んでいる地域を少しでも良くしたいという熱い思いが伝わってくる。

畳を高くし、黒い日除けのしてある春蘭栽培用の畑にも行つた。傍らの温室小屋も全て自分たちの手づくりだそうだ。その後、山に案内される。遠くに立山と海が望め、いろいろな野菜が植えてある畑の横には、高床のロッジがあった。水道も電気もないが、小さな囲炉裏と燭台と床下にたっぷりの薪があり、水は近くのせせらぎから汲めるそうだ。鳥の鳴く声が聞こえ、太古のやさしさに触れたような気がしてくる。山中を歩けばシイタケ栽培の木が並び、自生のイワカガミ、夏ハゼ、タラの芽、ワラビ、ミツバ等、花木や山菜の宝庫となっている。山道を歩く人の目の高さに植えてある春蘭も、実に心憎い配慮である。



再び“春蘭の宿”に戻り、七人衆の奥様や御母堂様の心尽くしの見事なお料理をいただいた。どれもこれも美味しく、宝の山の頂き物と手のぬくもりに感動した。心安まる豊かな自然に目を向け、守り、育て、生かし、ここを訪れる人を真心で迎える姿勢に深く感銘を受けた。いつまでも大事にしたい、日本のふるさとのような地であった。

(林 弥子/まれびとピア懇話会)



春蘭の里は「真心の里」

現地でこれ程、心の込もった熱い歓迎を受けたことはない。お話の一つずつ、案内していただいた事柄の一つずつ、お料理の品の一つずつに真心が込もっていた。商業的価値を云々する以前に、私は価値そのものに感じ入ってしまった。

私は、美川で淡水魚「はりんこ」の保護のボランティア活動をしているが、活動の中で「情報」の本来の意味である「情に報いること」の大切さを痛感した。情報とは、生きた人間が送受信すること。心の込もったやりとりが大切なである。例えば、ある人の頑張りがあって、それを感じ取った自分の心が動くのである。春蘭の里で、私はそれを感じ取った。

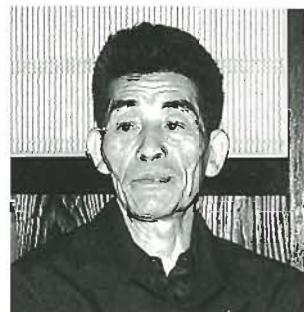
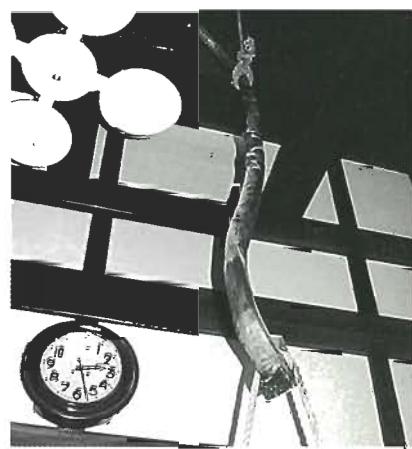
さて昨今、環境問題で地域の「持続可能な発展」ということが呼ばれている。能都町の春蘭の里の取り組みも、この方向を目指しているといえる。前置きが長くなつたが、私達が訪ねた一日について具体的に述べて、様々な皆様に是非ともご自分の目で、能都町の春蘭の里を確かめて欲しいと願っている。

春らんまんの好天に恵まれ、私達は往路快適なドライブを楽しんだ。春蘭の宿(定員10名)の、囲炉裏のあるお部屋でお話を伺つた。後で春蘭の自生地や栽培用の畑、手の込んだ竹製の鉢も見た。春蘭の道を歩きながら、シイタケを自分の手でもいた。宿に戻って、谷本知事も口にしたという春蘭のおにぎりや山菜、きのこのお料理をいただいた。天然のごりの甘露焼、山女(ヤマメ)の塩焼きも。この焼き加減は、素人の域ではなかつた。私はおかわりが欲しかつたが、取材なのでお上品にふるまつたため、おかわりはなかつた。損をした。

山菜好き、煮好きにとって、自然の恵みをいただいたことはこの上なく楽しかつたが、問題がないわけではない。ここは、大挙して押しかけてもらう所ではない。「仲間」が集う所だ。その点について「はつきり」させる事が一つ。もう一つは、収支のバランスの点について。十分に伺う時間がなかつたが、この2点が気になつた。しかし、全体としては、能都町らしい町づくりについて、「持続可能な発展」を考えつつ、その「形」を探し求められている姿に感銘を受けた。

すなわち、春蘭の里は「真心の里」なのである。この言葉に春蘭の里の人々と私達の思いを託して、私の報告とする。

(中正 進／はりんこ塾)



「地域づくりリーダー講座」開講

[加賀／中能登／門前]

地域の当面する問題を具体的に考えることをテーマに、県内3会場で「地域づくりリーダー講座」を行う。

協議会の参加団体に企画・実施の主体になっていただき、講座を開くことそのものが学びの機会となることも意図していました。今後も継続して実施されることが期待されます。加賀、中能登、門前で行われた講座についてサポートしたコーディネーターのレポートです。詳しい報告書等は事務局にありますので、興味のある方はお問い合わせ下さい。



コーディネーター
◆高峰博保（グルーヴィ）

「加賀温泉周辺探検隊」

地域づくりリーダー講座・加賀編は、南加賀地区の産業の核と言える温泉の今後の在り方を周辺地域の魅力発見からアプローチしようとするものです。温泉街をいかに魅力あるものに 만들けるかということは別の問題としてあります。2回に分けて実施。初回に加賀温泉に宿泊しながら楽しむためのプランをグループに分かれて立案。半月後に行った2回目は、そのプランをベースに実際に体験を行いました。講座を通じて感じたことを簡潔に次にまとめてみた。

【温泉の基本コンセプト】

日本の温泉は湯治場として発達してきた。それがヨーロッパに伝わり、クアハウスとなっています。最近はそれが日本に逆輸入されてきています。

一方、日本の温泉は快楽の追求、楽しみの場として拡大してきた。その路線が限界を過ぎ、凋落の一途をたどっているのが現状でしょう。今一度、歴史を振り返り、21世紀に通用するコンセプトを樹立すべきなのです。

〔21世紀・温泉の基本コンセプト〕

「癒しの湯治場」



加賀編



【癒しの領域】

◎身体を癒す

病気をした人がリハビリを兼ねて温泉に長逗留できるようなメニューが欲しい。

◎心を癒す

仕事や人間関係に疲れた人がリフレッシュできるためには、落ちていた静かな雰囲気と、自然や生き物とのふれあいがよい。

◎人間関係を癒す

崩れかかった関係を修復するための旅も価値があり、新鮮な感動があるメニューを期待したい。

◎文化を癒す

新たな文化を創造するために、古くから伝えられてきている文化に触れることが大切です。

◎社会を癒す

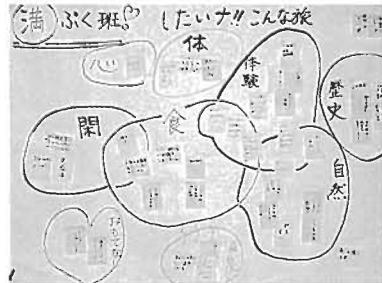
病んだ社会を癒すためには、これまでの早い動きをとめて、じっくりと考える機会をもつべきです。温泉でのコンベンションはゆったりとしたプログラムで構成したい。

◎癒しの哲学を構築する

温泉事業を通じて、21世紀に通用する「癒しの哲学」を構築すべきです。癒しを実践するためのソフトウェアを組み合わせ、人も社会も癒されてゆく場を加賀に作りたい。

【コンセプト深化のためのアイデア】

女性をゲストにした温泉談議を同時多発で行う。豪勢な食事ではなく、21世紀の食の理想を追求したメニュー開発を行いたい。精進料理や病人食があつてもよい。お祭り料理ではなく、普段の食事が魅力的かもしれない。橋立の漁師の食事、大聖寺の町民の食事とか、山村の林家の食事などもいい。全ての旅館が参加すれば、100ぐらいはできるのではないか。



【今回の講座の意義】

①自ら考えることの重要性

- ・ワンウエイで語ることは最少限にしたい。
- ・ワンウエイで話を聞くことは卒業しましょう。
- ・自ら考えたことを表現することにより鍛えられ、面白くなります。

②グループで語り合い、考えることの成果

- ・対話の中から新しい着想やアイデアが生まれる可能性が高い。
- ・グループ・ダイナミズムは個人での限界を突破することにあります。
- ・新たな知を創造するためには、少人数でのディスカッションが必要です。

③コンセプトの設定とそこからの発想

- ・コンセプトは事業や商品のコアとなる考え方を一言で表現したもの。
- ・発想基点であり、判断基準です。
- ・育てるべき卵のようなものであります。



④今回のコンセプトは「探検隊」

- ・歩くことが基本。
- ・コースは柔軟性があること。
- ・発見の楽しみ。
- ・人との出会い。
- ・途中での休憩、食事が重要です。
- ・景観の魅力、価値を開発することにつながります。



⑤継続できる活動

- ・まず地域の人達が我が町を探検してまわることが大切です。
- ・町の魅力は発見するもの、付加するもの、創るもの。
- ・町は教室なのです。



⑥町の魅力アップを

- ・景観整備。
- ・歩きやすい街、道づくり。
- ・ポイントづくり。

⑦探検マップを作ること

- ・ポイント、人を紹介する地図が必要です。
- ・行ってみたいくなるようなコメントを加えておきます。

コーディネーター◆赤須治郎(赤須企画事務所)

「七尾西湾・周遊地図づくり」



中能登編

【地域間交流をテーマに】

地図づくりから地域間交流を始めよう。隣町を知ると自分のまちもよく分かる。能登島町と中島町を結ぶ中能登農道橋(愛称:ツインブリッジ)が3月29日に開通し、七尾西湾を陸路で一周できるようになった。交通の変化は地域社会にも大きな変化をもたらす。

本講座はこのような状況変化に地域づくり団体が積極的に対応していくために、地域間交流をテーマに掲げて企画した。講座の開講がツインブリッジ開通の1週間前で、しかも、七尾西湾周遊地図づくりというタイムリーな企画であったため、マスコミ数社が当日の取材に来てくれた。

【講座開催までのプロセスが大切】

結論から先に述べるなら講座は成功した。本講座の大的目的は「県内各地に地域づくりの担い手を育てていくこと」であり、中目的は「中能登地区の地域間交流を図ること」であった。地図づくりは地域間交流を考えるための手段と位置づけた。

講座を企画運営したのは“ふるさと21青年塾”(田鶴浜)のメンバーである。彼らが七尾西湾の自治体や地域づくり団体に協力を呼びかけ、“夢追い人”を探し、参加者を募った。講座を準備するプロセスで、前記の大目的と中目

的にかなった活動を展開し、その結果として37名の参加者を集められた。目的は達成できたと言って良いだろう。

【継続した交流を】

地図づくりを通して隣町のことをいろいろ知ることが出来たのも収穫である。また、地図づくりから更に前進して、交流を深めていくイベントやネットワークづくりなどが話し合われたのも大きな成果であった。プログラム内容では、バス巡りと地図づくりがうまく噛み合わなかつたことが反省点としてあげられる。

講座終了後の反省会で、講座の成果を地域づくりに活かしていくことの必要性を青年塾のメンバーと話し合つた。講座を通して出来た中能登のネットワークをどのように育てていくか。様々な交流アイディアをどのようにして実現していくか。これらが本講座に参画した者たちの今年のテーマになるであろう。



■地図づくりと交流アイディア

【自然環境チーム】

西湾各地の自然観察地図づくりから西湾クリーンキャンペーンを発想

- ①自然と人間が共存できる環境を守るために湾岸河川を一斉清掃
- ②七尾西湾にちなんで7月の第一(ワン)日曜、もしくは24日に実施
- ③呼びかけ人を西湾の魚と鳥、主催を協議会の中能登支部とする
- ④行政、PTA、商工会、JA、漁協、こどもたちなどに呼びかける



【観光チーム】

観光スポット地図づくりから西湾全域の体験型・滞在型観光を提案

- ①自然体験コース(野鳥観察、昆虫採集、山菜取り、魚釣り、海水浴)
- ②匠の技体験コース(建具、ガラス工芸)
- ③マリンスポーツ、祭り、靈水巡りなどの体験
- ④泊まらないとわからん西湾(温泉、祭り、イベント)
- ⑤周遊の方法としてヘリコプター、自転車、木炭バス、遊覧船、徒歩を提案

【特産品チーム】

西湾各地の特産品地図づくり

- ①パンフレットを切り貼りした楽しい地図づくり
- ②文字情報、商品写真だけではなく人物写真も貼付
- ③地域の顔が見える特産品づくりの必要性を話し合う



【イベント祭りチーム】

西湾各地の祭り地図づくりから西湾全域のイベントを発想

- ①七尾西湾トライアスロン(和倉からスイムで能登島、能登島はバイクで1周、ツインブリッジから和倉までラン)
- ②七尾西湾よさこい祭り(1市3町から50チーム参加)
- ③七尾西湾大花火大会(和倉温泉から机島までの2キロをナイアガラの滝に)

【ノンセクションチーム】

情報発信をテーマにした提案型の地図づくり

- ①七尾西湾岸の道路情報やイベント情報を提供する掲示板を設置する
- ②自治体ごとに情報発信基地を設けて、そのネットワークをつくる
- ③これらの広域的課題を実現するために七尾西湾岸協議会をつくる

「イベント企画実践塾」

コーディネーター 濱 博一（アスリック）



門前編



門前では参加者がグループに別れて、イベントの企画立案からプレゼンテーションまでを行う。最後に特別ゲストの猪爪範子さんにお話いただく。夜の交流会では地域の特産品を味わい、懇親を深めました。

【イベントを成功させる役割分担】

◇アイディアマンは、意識して コンセプトメーカー(企画立案者)と協働すること

この時、アイディアマン自身が走って実行すると、周りの人はついてこれなくなる。物語を作り上げて、賛同者・共感者を募るコンセプトメーカーと協働してアイディアを企画に育てなればならない。

◇実行部隊自身に評価をしてもらう

実行部隊と別な人が評価者になると、心理的に分裂する。イベント当日に必ず反省会をして自ら評価者になつてもらう必要がある。

◇プロデューサとの関係には、ロマンをベースに

アイディアマン・コンセプトメーカー・実行部隊・評価者の実行委員会と、イベント全体を取りまとめるプロデューサとは、緊密な関係を作り上げて最高の成果を得る必要がある。人間関係そのものなので、地域を良くしたいというロマンを共有することが基本である。



【継続の原動力】

イベントを継続するには、経済的な側面が必要。カンヌ映画祭は、世界の映画の買い付け市場を作っているから継続する。パリコレクション、アスペン音楽祭も同様の仕組みがある。

お金を稼ぐことは罪悪ではない。その使い方が問題である。能登には「金持ちを旦那様とは言わない。周囲に効果的なお金の使い方をする人を旦那様と呼ぶ」風習があるらしい。「だんなになるイベントを企画・実施しよう！」

【参加者と講座内容について】

毎回感ずることであるが、講座参加者によっては、自分を表現することに慣れていない方がおり、次のような症状が発生する。

◇話はできるが書き出せない

大切なポイントに気づいているが、書き留めずに話すばかりなので蒸発していく。従って、自分でも大切なことに気づいていることを再確認できない。

◇前向きな思考ができない

ブレーンストーミングの根本は、前向きな発想が求められる。しかし、日常のさまざまな問題点・困難性に囚われたまま脱却できず、発想が前向きに展開できない。

このような参加者に対して、どのような講座内容にすればよいのか、つかみきれていない。「自分を表現する講座」か別途必要とは思うが、そのままで参加者が集まりそうに無い。類似の講座に何度も加わった参加者は徐々に慣れていく方もいるようなので、テーマを変えて設定し、数多く実施するのが現実的ようである。

主催団体と猪爪先生、赤須コーディネーター、事務局に感謝

今回の講座を主催して頂いた「じんのび悠人」の方々に改めて感謝したい。猪爪先生からも参加者に地域づくり論的確なアドバイスを頂いた。赤須コーディネーターとともに各班を支援して頂いたおかげで、短時間に慣れないにも関わらず驚くほどの成果が出た。

当日の交流会には地元のさまざまな方々を始め、門前町助役にも参加して頂いた。また、まんだら村に別荘を構えておられる角偉三郎氏にも、途中から参加頂き、貴重な一時を共有することができた。交流会の出し物がすばらしく、参加者は改めて「じんのび悠人」のパワーと素晴らしい実感したようで、エネルギーを貰った参加者も多かったようである。「全国区の著名人を仲間にする秘密」の一端に触れ体験した交流会であり、今回の講座のポイントの一つだった「感動を共有するイベントが大切」をそのまま体现したような場だった。

この輪が広がることを願ってやまない。



地域づくり推進協議会を活用して
全国に出かけてゆきましょう。
ネットワークを広げ、
継続的につきあえる仲間を
つくりたいものです。
このコーナーでは、全国に出かけてきた
メンバーからのレポートを紹介します。

福井でも興味を示してくれた 「地域づくり屋台」

福井県地域づくりネットワーク協議会「研修交流会 参加レポート」

2月27日に福井県地域づくりネットワーク協議会の研修交流会に参加し、石川県の協議会活動について報告してきた。参加者は25名と小規模。梅干しコンクールで名高い大分県大山町から、町の職員で仕掛け人の緒方英雄さんを講師に迎えた研修であった。大分県にありながら町の領事館を福岡市につくるなど、緒方さんの講演内容には刺激を受けた。私は主に「地域づくり屋台」のことを語った。研修交流会には「寄り合い・触れ合い・話し合い」が必要だが、案外「話し合い」が不足している。だから徹底討論を掲げた「屋台」が支持された。また、10分科会も用意して「選べる・学べる・楽しめる」という姿勢を打ち出

したことも成功した要因、というような報告をした。興味を持っていただけたようで、大分の緒方さんから次の屋台には職員を参加させるとの約束をいただいた。研修の最後には、福井と石川の「県際交流」として、屋台を含めそれぞれの研修交流会への相互参加と、本誌「My Page」への取材協力が事務局から提案された。なお、屋台の報告は福井をはじめ、奈良県の協議会、珠洲市の協議会、地域活性化センターの全国交流会でも行つた。いずれも反応が良く、次回が期待されている状況である。

赤須治郎／赤須企画事務所



◆日南会場



◆野外で行われた延岡会場



◆佐土原会場で「久峰うづら車」を制作

第10回 地域づくり団体全国研修交流会「宮崎大会」

第10回 地域づくり団体全国研修会 に参加して

この度、宮崎県で開催された第10回地域づくり団体全国研修会に参加いたしました。

この宮崎大会は宮崎の各市町村においてそれぞれの分散交流会があり、その内容は全部あたまにビタミンについて紹介されていました。例えば、青島で行われるものは最初の頭文字をとり、ビタミンA(あおしま)という具合です。

私は佐土原でのビタミンS(さどわら)に参加しました。この分散会の受け入れ団体は「佐土原くじら会」といって、職業、年齢、住居地域も異なる人たちの集団です。現在、会員数は20代から70代まで130名。約300年前、寛文4年の頃、幼くして5代藩主となつた島津惟久公に、その母が「鯨のように大きく力強い男子に育つように」と言ったという言い伝えがあり、そこから鯨という言葉をとり、平成5年に町おこしグループがこのくじら会を作つたのだそうです。

会合は、すぐ前に太平洋があり、いつも日本海に落ちる夕日しか見られない石川県人の私にとって日の出を目の当たりにできる佐土原の国民宿舎石崎浜荘で開催され、この会場で私は「せこしたなアーバー」というグループに参加しました。この言葉は宮崎の方言で「ちょっと忙しかった」とか「ちょっと慌てた」ことがあった時に使う言葉だそうです。

参加者16名、それぞれ色々な会の人たちが自分たちの

会の失敗談を本音で語り、またそれに対して意見を言つたりアドバイスをもらつたり、わきあいあいの雰囲気が始まり、あつと言う間に時間が過ぎてしまいました。その間、延命長寿、無病息災と言われている「久峰うずら車」の制作に全員が取り組み、また夜は「よ鍋談義」の会場で伝統芸能を披露してもらい、ここでまた様々な人たちと出会い、そしていろんな情報交換の場所となり、本当に有意義な時間を多くの人たちと共有でき、ここならではの光景でした。

2日目は県内に分散していた人たちが一同に「宮崎シーガイア」の会場に集まり、先ず各分散会のそれぞれの代表が前日の発表を行い、その後経済キャスターの西村晃氏がゴミの話から駆け込みを取り上げ、「おんな型経済の時代がやってくる」と題しての講演で、この地域づくり団体全国研修会を締めくくりました。

このようにして宮崎での二日間はとても充実したもので、今、その時の人たちから何通かの手紙を受け取っています。今回の事が宮崎だけで終わるのではなく、これからもその人たちとのグループと交流が継続できればと願っています。

本当に宮崎は春のように暖かかったのですが、それと同じくらい暖かい人たちとの出会いは、今回のこの会のテーマである一生忘れることが出来ない素晴らしいビタミンという栄養を私に与えてくれました。

穴田真規子／SMILE(志賀町国際交流の会)

研修交流会で 全国の友だちができる

1日目の佐土原分散会は、まずフォークソングでオープニング。彼らの作詞作曲「佐土原町の歌」には、自分たちの町に対する愛着心が込められていて印象的。自分たちの町には他の町に誇れる物が何もないとはやく前に、この若者の様に自分の町を愛し誇りを持てる、そんな町づくりをしなければいけないと思った。昭和30年に人口2万だった町が、現在3万2千だと聞く、それは単に企業誘致、宅地造成だけが理由ではなさそうだ。平成17年には3万7千人を見込んでいること。鯨をメインにそれぞれ様々なアイディアで楽しそうに町づくりをしている姿は、自分にとって励みになる。

2日目は全体会で前日の12分散会の報告が行われた。一人の持ち時間が決められ、合図のベルが鳴る。オーバーしたら遠慮なく何回でも鳴らす、今までに無い?スタイルで、是非これから私達も真似たいことである。

その後、西村氏の講演でおんな型経済の時代が来ているマーケティング、集客ソフトについて聴く。買う気のない人に買わせる知恵、今、客が何を求めているか、「微・芯・博・名」という言葉も飛び出し、地場産の時代であることをユーモアたっぷりに語ってくださいました。ビタミン宮崎の名の通り、ビタミンを沢山もらって、佐土原はもちろん山口、山梨、沖縄、岩手…の友だちもでき、大変収穫のある研修会に参加できたことに深く感謝します。これからも自分に出来ることを見つめ、楽しみながら夢のある町づくりの手伝いができればと思います。

砂山 芳子／SMILE(志賀町国際交流の会)



◆隠しあはひとつ ふるさと無限大のスローガンが光った開会式



◆協議会のメンバーも加わった進行

Core Essay

【コーディネーター】

山崎達文

金沢美術工芸大学美術工芸研究所

愛知県足助町の三州足助屋敷を訪問したのは、もう随分前の事だが、もう一度思い出しておこうと思う。普段あまり意識しない“地域づくり”を想う、自身の契機にはなるかもしれない。

三州足助屋敷は、地方行政が取り組んだ地域おこしの最初期の成功例として既に有名であった。好評な噂も聴いていたので、お声のかかったのを幸いシンポジウム「The 漆」で漆芸についての報告を行った。当時、私は金沢市の金沢卯辰山工芸工房という後継者養成を主とする工芸専門機関の設立に関わり、走りだした運営の渦中にいた。だから、実は集会より屋敷の活動状況の実態に関心があったのだった。

印象的だったのは、管理部門を担当する町職員、桶屋や下駄屋さん、売り子さんも賄いのおばあちゃん

”地域づくり”
を想う
〔三州足助屋敷で感じたこと〕

ん達も、みんなが実際に楽しそうだったことだ。大きな土間の厨では、薪をくべたかまどで大鍋いっぱいのカレーがぐつぐつと音をたてていた。職員全員の昼食用なのだといい、毎日こうしている、とおばあちゃんは言った。奥では菜葉を刻んでいるおばさん達もいる。ここはいわば楽屋裏で、他の炭焼や機織小屋のように見学入館者に見せているわけではなかつたらしいのだが、心に残る光景であった。

おそらく、足助屋敷の設計には役場内外の知恵者やコンサルタントが参画ただろう。理念や趣旨をめぐるさまざまな論議があつただろう。そして、時機と人を得て発足した屋敷は、足助町の観光客誘致や產品の需要拡大にも大きな成果をもたらしたに違いない。けれども、そんなことには関係も関心もない町のお年寄りたちも、日々ここで、人と社会と結びついて活き活きと働いている。このことこそ、構想の先にある本当の効果ではなかつたろうか。足助屋敷は、この土地で生活する人たちの意志とともに融合して、人々の自己再確認の拠所となつてゐるようであった。控えめながら町や屋敷の自慢をしてくれた、かまど番のお年寄が見せた嬉しそうな素顔が、そう語っていた。

夜の帳がおりる頃、昼間は鍛冶屋だったおやじさんが、ギター片手に唄い始めた。(ちいさな町だけれど)俺は好きだ、この足助の町を…。帰途、このフレーズが脳裏で勝手に反芻され続け、私は、あの町に住まいする人たちに強烈な羨ましさを感じていた。

地域づくり 【key word】 [キーワード]

「未来価値」

私達の活動は同時代に生きる人々からだけでなく、自分達の子供や孫の世代にも評価される。重視すべきは未来の世代に何を伝えようとするのか、何が残せるかである。価値判断の基準を未来の世代の可能性をどれだけ広げられるかにおくこと、それが「未来価値」のコンセプトである。50年後、100年後にも認められるような活動を展開し、行動を支える理念、哲学を構築してゆきたい。

「関係志向」

人の存在は関係の総和として確認されうる。純粹に独立した存在は幻想である。家族や友人・知人、仕事関係の人々から、使っているものたち、育てている動植物から環境中の微生物まで、多様な関係の網の中の一つの点として人はいる。いつかは消えゆくものとして、一つ一つの関係を大切にすること。それはあらゆる活動、事業に共通するテーマである。新たな関係を求めて旅に出たい。

編集後記

地 球規模でのバランスを念頭に、企業活動からさまざまな事業、生活を再検討すべき時です。新しい価値を提案し、実践することが強く求められます。パリアフリーや地域を目指すことで次の時代が見えてくるのではないか。(高峰)

石川県地域づくり推進協議会 情報誌
My Page
Vol.4 1999年3月発行

発行

石川県地域づくり推進協議会
金沢市広坂2-1-1 〒920-8580
石川県総務部地方課
TEL076-223-9058 FAX076-223-9486
●編集
石川県地域づくり推進協議会 情報部会